

先日ある図書館から「銘物地地」の訓み方について問い合わせがあった。名物裂の起源に関連して文禄4年の奥書のある別所吉兵衛の『名器録』にある言葉だという注記がある。しかし、一見意味不明である。銘、物、地の3字は習見する所であり、特に問題はないようだ。地という字がいかにも難物である。定石に従って、諸橋大漢和にあたってみた。この膨大な漢和辞典には、かなりの奇字・難字も丹念に拾ってある。にもかかわらずこれにも出てこないとなると問題である。念のために異体字集の類も繰ってみたが出てこない。こうなると、一体「地」という字は本当に存在するのだろうか。なにかのまちがいがあってはなからうか。

ところで、文禄4年の奥書のある別所吉兵衛の『名器録』なる資料であるが、なぜか、『国書総目録』にも出てこない。しかし、出典も明示しての問い合わせなのだから全く無根のこととも思えない。参考のために開いてみた『原色茶道大辞典』（淡交社、昭和50年）の「名物裂」の項にも「『名器録』に「名物地地」として」云々とある。

そこでさらに何か手がかりはないかと『雑誌記事索引』を繰って目ぼしい論文の若干にあたって行くうちに、すぐに守田公夫著「名物裂」（『古美術』13号、昭和41年5月）に行きあたった。これに、明石染人によって『名物錦繡類纂』の解説書中に紹介された新史料として

『名器録』にある「銘物地地」のことが触れられている。これでどうやら結論が出そうである。早速この解説書にあたってみた。『名物錦繡類纂』全12輯（昭和8～14刊）の付録解説書『名物裂の研究』に「文禄4年7月15日の奥書のある別所吉兵衛の署名にかかる『名器録』と稱する稿本の中に「銘物地地」の條目のあることを見出したので名物裂の名稱は既に桃山時代に可なり有名となり茶人間に珍重されてきたことを知ることができて、それを茲に明かにして置きたいのである。」とでている。

しかし、「地」という字については、結局未解決である。明石氏は上記引用部分に続いて「名器録、稿本であったのを大正9年9月10日蠻茶会の手によって東京辻本写真工芸社がコロタイプ版として発行しているのに私は據ったものである。」という。このコロタイプ版は当館でも所蔵しており、これによって疑問は水解した。幽霊の正体見たり枯尾花。上図をみれば、一目瞭然であろう。どう見ても「銘物切記」としか読めない。つまり、明石氏が切を地に読みあやまり、その上「地」という千古未曾有の文字をデッチ上げたのである。

以上によって我々は先人の垂れ賜うた教訓を再確認することになった。曰く「孫引は厳につつしむべきこと」、「翻刻本を鵝飲みにしないこと。」

（参考課 土屋紀義）

銘物切地